

「なぜ必敗の戦争を始めたのか

陸軍エリート将校反省会議を読んで

安全保障委員会事務局長

中川 義章 陸自78

本書は、半藤一利氏が、編集して解説した昭和史物の文春新書です。まあ読まずとも内容が大体推し図れるもので、手に取る必要はないと考えられる会員の皆様に、お知らせしたいことがあり、安全保障委員会の事務局長が急遽一文を書いてみました。

本書のまえがきに、偕行社が貴重な記録として特別の刊行許可を与えてくれたことに対し、謝辞があります。とにかく、このままでは「幻の座談会」となって、世に出ることがなかった偕行社の歴史資料が、出版されたことは大変喜ばしいことです。

半藤一利氏は、先の大戦のことを太平洋戦争と呼称される方であり、亡父が生前「大東亜戦争に従軍したのではない」と言っていたことを思い起すまでもなく、私は氏を昭和史の第一人者と呼ぶのに違和感を持ちます。

愛国の至情熱し難く軍籍に身を投じ、あるいは税金泥棒と罵られる自衛隊に入隊した会員の皆様も、程度の差

はあれ若干の留保を感じられているものと思います。

とはいえ、数多い近現代史研究者のなかでは、影響力では第一人者であると思われる氏が、なぜ陸軍エリート将校反省会議を題材にしたのかと言うと、「実はわたくしもあるときまで、『海軍善玉論』に与するところがありましたから、大きなことは言えないのですが、やはり歴史はできるかぎり広く公正に史料をみて検討しなければ学んだことにはならないと常々思っています」と述べ、「果たして陸軍だけが悪かったのか？」と問題を提起しています。

副題の陸軍エリート将校反省会議とは、会員の中にはご存じの方がおられるかと思いますが、会誌『偕行』に連載された「大東亜戦争の開戦の経緯」（昭和51年12月号／昭和53年3月号）と題する座談会のことです。

今回は、連載15回の内、初回から3回までをカットして、内容のダブリを削り、小見出しを修正したとのことですが、（編集注：関連記事54頁）

戦後生まれの昭和前期の国際情勢などに疎い読者のため、随所に、座談会参加者が一般常識として使う用語の解と、全般情勢の説明のため解説が織り込まれています。

今回は、皆様にお知らせするのを急いでおり、元の連載記事との異同を検

証していませんが、記憶にある記事と比べると、大変読みやすくなっています。そこは流石に文藝春秋社の敏腕の編集者の面目躍如です。

「改竄や隠蔽や書き改めなどのとにかく悪質なことはいっさいしておりません」と氏も述べています。あるとすれば、氏の誤解に基づく記述が混入しているかも知れません。発見次第、追ってお知らせしたいと思います。

氏は、「本書を読むことで、『陸軍悪玉論』のこれまでの見方がいっぺんに変わる、というような驚天動地の陸海逆転が起きると思いませんが、公正な歴史解釈には少しは近づけるのではないのかと思います」と述べ、「昭和史は善玉悪玉の二者択一で割り切れるものではない」という見解を明らかにしています。

誤りの流布に関与したご本人としての反省が薄く謝罪がないのは残念ですが、作家という表現者としての限界かと理解しました。

本書は、7章と、長めのあとがきで構成されており、各章で三國同盟、北部仏印進駐、南部仏印進駐、独ソ開戦、御前会議、東條内閣の成立、対米開戦という歴史の分岐点を捉え、日本政府内で何が起きていたのかについて、当時陸軍省と参謀本部に勤務していた中堅エリート将校が20有余年後に語った

内容をまとめています。「余話と雑話」というあとがきが、書き下ろしとすることでしょう。

この書き下ろしに、大変面白い内容が含まれています。南部仏印進駐、そして日米開戦へと国策を強引に動かしていた海軍の「第一委員会」について、戦後の「海軍良識派」の「活動」です。この海軍の強硬派の存在について、氏が旧海軍軍人に聞いても「よく知らんなあ」と異口同音の答えになつたそうです。

高木惣吉元少将は、「そんなことは、半藤君、知らなくてもいいから、余計な詮索はしないほうがいいと思うよ」と忠告したそうです。善玉の海軍としては、最も痛いところであり、組織的に言及しないことにして隠蔽したようです。氏が、「海軍善玉論」の原因の一つと述べている海軍のまとまりやすい特長の発露でしょう。今はやりの「フェイクニュース」の原型が、ここに見られます。

仲の悪かった陸軍と海軍は、戦後は国内で情報戦・宣伝戦を戦い、陸軍が敗れたということでしょうか。この事実を知りながら、戦中叢書や海軍関係者の著作を読めば、また別の読み取りが可能になるでしょう。

本書は、以上のような大変興味深い内容であり、昭和史の第一人者の解説

が付されています。若い世代に伝えるため、子供や孫にプレゼントするとう使い方もありそうです。

座談会の発言者に懐かしいお名前を発見しました。著書『大東亜補給戦』（原書房、1986）を残された中原茂敏元大佐（士39）です。中原様には、昭和57年の夏の研究会で先輩から、「この者は、米国の大学へ留学します」と紹介していただきました。「それではアメリカで員外（学生）か。専門は磨いて高いレベルになればなるほど、その他の分野で活きるから頑張るようになさい」と激励を受けました。

員外学生（陸軍の部外委託学生。確か中原様は東大工学部へ派遣されている）の先輩として、駆け出しの2等陸尉に対し、お話を頂きました。同じ研究会にはその他の発言者の方々がおられましたがお元気なお姿だけ拝見して、直接お話ができなかつたことは、当然と言えば当然ですが、残念なことでもありました。

会誌『偕行』には、昭和50年代の記事を中心に、貴重な証言が埋もれている可能性があります。部外の専門家のみに、発見と紹介を委ねるのではなく、偕行社会員として研究を頑張りたいと思います。

（平成31年2月25日）